



欧州の現場を見て

知的障害者授産施設

金谷 透

〈上〉



【かなや・透】1947年、太田市生まれ。78年から81年までアムネスティ・インターナショナル日本支部で、人権擁護問題に取り組み、89年、新里村に「赤城屋」を設立。2000年4月から現職。54歳。

富岡市の知的障害者授産施設「セルブ水土舎」の金谷透施設長と職員が10月20日から29日まで、フランスとドイツの授産施設を訪問。授産現場や就労者の生活ぶりを観察した。両国の授産施設では、日本の施設で一般的な下請け作業はほとんどなく、それぞれが民間企業並みの経営努力を続けている。日本の一般的な授産施設とは全く異なる両国の施設の取り組みを、金谷施設長に紹介してもらった。

南フランス・プロバンス 清たない障害者のための施設。地方の西北端に位置するロシオン村は人口約3500人。この小さな村に、ジャム製造で有名な知的障害者授産施設「ルーマニエ」がある。一昨年に続いて再訪したのは、ジャムのレシビと製造のポイントを学ぶとともに、入所生活と地域生活支援の実態を知りたかったからだ。

同国では、労働能力が通常の3分の1を超えているか否かで、受け入れ施設が分かれる。同施設が属する就労援助センター(CAT)は、労働能力が3分の1に満たない障害者のための施設。3分の1以上なら福祉工場(AP)がある。APでは労働者としての法的地位が保障されており、労働法が適用される。CATの保護就労は労働法の適用を受けず日本の授産法に似ている。ただ、個人的な印象では、ルーマニエの就労者は日本の施設の平均より能力が高く、平準化していると感じた。

同施設の就労者は35人。現場職員は指導部6人(うちパート3人)、販売促進員2人、プロの現場技術者は3人だ。他に精神科医、音楽療法士、心理学者、身体表現や絵画指導員がバックアップする。事務は、施設



ルーマニエでジャム製造に取り組み障害者

チームワークは感動的 1人が何役もこなす

フランス

長1人と副施設長2人、一般職員3人の計6人が受け持つ。この6人は、ルーマニエを運営する法人が持つAP(定員18人)の事務

もカバーする。APを含めた施設職員総数は50人(パートは10人)。これは午後5時からのパートである夜警員3人と生活支援者4人も含まれている。生活支援者は、日本では昼間の常勤だが、夜間勤務を認められれば複数人で仕事ができ効率が良いはずだ。日本やドイツと異なり、両国では授産収入を職員給与に配分することができる。

同施設のジャムの年間総生産量は60ト、販路はEU(欧州連合)11カ国に及び、年間授産総収入は、私たちが施設の約2倍にあたる約7600万円(就労者1人当たり200万円強)。これに国の助成金約4700万円が加わる。フランスの最低賃金は月額約1万8000円。同施設の就労者の平均収入は、授産賃金平均約2万2000円と福祉年金約6万5000円。さらに、全員ではないが他に支給される給付金を足せば、最低賃金とほぼ同額になる。授産賃金平均は、私たちの施設と同額だ。日本では、授産賃金に福祉年金約6万7000円(65歳の場合)が加わる。日本の施設の全国平均賃金は約1万2000円。これを上回る施設は、県内20施設のうちわずか2施設にとどまる。

CATの給与は、最低賃金の5%以上(約5400円)、APは35%を保障しなければならぬ。日本に最低授産賃金規定はない。十分だ。

が、1カ月5000円の施設もあるという。同施設の1日は、午前9時に始まる。朝礼やあいさつは一切ない。プロの指導は段取りがしっかりしており、こうしたものは必要ないらしい。彼らの集中心力とチームワークは感動的だ。1人が材料の加工や釜(かま)のかくはん、瓶詰めなど何役もこなしながら、組織的に作業を進めていく。私たちのハム・ソーセージ部門に似ていないでもない。正午に昼食のため中断。午後1時半に作業を再開。途中30分の休憩を挟んで午後5時で終了する。実働6時間だ。

同施設には付属の寮がある。部屋はすべて個室で、女子8人、男子14人が暮らしている。寮以外で暮らす施設利用者は、APの7人を含め15人。この中には既婚者が4人いる。ルーマニエの利用者のひとり、シルビアさんにはAPで働く夫との間に2歳になる子供がいる。寮ではなく民間アパートに住んでいるが、そのアパートは1階が台所と応接間兼居間(それぞれ6畳ほど)、バスルームという間取り。2階には寝室が2部屋と3畳ほどの収納室がある。たばこ、手狭になったので、近くの養母の家に引っ越し予定という。シルビアさんが働いている間、子供はこの養母が世話をする。夜間の生活支援者の訪問は、週に1度くらい。2人にはそれぞれで十分だ。